

「平泉澄博士の歴史観と西欧思想

— 皇国史観への一視角 —

多田真鋤

目次

- 一、歴史学と価値意識
- 二、平泉史学に対する諸評価
- 三、E・バークと平泉史学
- 四、むすび—皇国史観への一視角—

一、歴史学と価値意識

「平泉澄博士の歴史観と西欧思想―皇国史観への一視角―」と題した本稿において、私は平泉博士（以下平泉氏と称す）の歴史観と関係深いE・バークの保守主義の思想について一試論を行ってみようと思う。皇国史観、国体史観、皇道史観という術語は、平泉氏自らが呼称されたものではなく、戦後の日本史学界で戦前、戦中における日本史への見方や考え方に対する呼称として使用されはじめたものであろう。平泉史学、すなわち皇国史観という術語が、誰によつて、またいつの時期から使用されはじめたかを寡聞にして私は知らない。しかし、戦後の日本史学界をはじめ社会科学界の一部では、さきの大戦を、日本指導部の共同謀議に基づくアジア侵略を、太平洋において阻止し、民主主義、自由主義の理想を護持したのがアメリカをはじめとする自由民主国家だったのであつて、この大戦は日本ファシズムに対する民主主義の勝利と規定する東京裁判史観、または断罪史観ともいうべき歴史観が横溢してきたのであつた。戦時中の日本政府が閣議決定に基づいて命名した「大東亜戦争」、いわば、百数十年にわたる欧米列強によるアジア侵略からの解放戦争との歴史観を、これらの左派のいわゆる進歩的文化人らは否定し続けてきた。その状況下において、八紘一宇、大東亜共栄の理念、皇道実践というような戦時中の標語の歴史哲学的基礎を定めたのが皇国史観であるとの認識が生じてきたといえる。左派勢力の断罪史観の影響は、戦後の歴史教育にも深く侵透し、元首相細川護熙氏の「侵略戦争」肯定の発言にまであらわれてきている。本論に入るに先立って、まず平泉氏の略歴について記述しておこう。

日本史学の専攻者においては、余りにも著名な平泉氏も、戦後世代の諸学者、学生にとっては疎遠な存在であると思えるからである。

「大百科辞典」(平凡社刊)のなかに、藤原彰氏担当の平泉氏に関する項目において、

「平泉澄(1895—1984)歴史学者。福井県生れ、一九一九年東京帝国大学文学部国史学科を卒業し、講師、助教を経て、一九三五年(昭和一〇年)教授となった。日本中世史の研究者であったが、教授就任の前後から熱烈な皇国史観の主唱者となり、戦時下の国史学界をリードするとともに、軍部との関係を深め、社会的にも大きな影響力をもった。……敗戦後東大を辞して、郷里の福井県平泉の白山神社に引きこもったが、思想的立場を変えず、皇学館大学学事顧問、日本を守る国民会議発起人などとして活動した。その皇国史観は、神勅に示された「万古不易の国体」を絶対のものとし、国史はその国体を顕現するための歴史だと主張するもので、著書「伝統」(一九四〇年)などで、皇国史観の先駆者としての江戸時代の国学者を熱心に顕彰した」と紹介されている。私は従来、ヨーロッパ政治思想史、とりわけドイツ政治思想の学域や政治哲学に関する分野を専攻してきたのであって、日本史学の分野については全くの門外漢である。しかし、政治哲学の学域を研究するには、歴史哲学の分野への関心が必然的に随伴してくる。従来、イギリスのE・バークの思想的影響のもとに、有機体論的政治思想を明確に表明したアダム・ミュラー(Adam Müller)、ドイツの後期ローマン主義のラガルド(Paul de Lagarde)、文明史観のシュペングラー(Oswald Spengler)、理念史学のマイネッケ(Friedrich Meinecke)等の史学思想に関心をはらってきた。⁽¹⁾私は、歴史学には大別して二つの流れがあるように思う。実証(考証)史学と経世(国)史学である。私のいう経世史学とは、主として一九世紀にみられるように、ナショナリズムの高揚に寄与し、実証的研究を軽視し自国の国是の確立に重点をおく歴史学である。例えば、一九世紀イギリスのマッコリー(Thomas. B. Macaulay 1800—59)の著作「ジェームス二世即位後のイギリス史」、フランスのミシュレ(Jules Michelet, 1798—1874)の「ローマン主義的、民族主義的傾向を鮮明に表した「フランス史」、アメリカの海軍長官であり海軍兵学校の創立者バンクロフト(George Bancroft 1800—91)の著

作「アメリカ合衆国史」、ドイツのビスマルクの小ドイツ主義に基づく統一を、精神的に支持したトライチユケ(Heinrich von Treitschke 1834—96)の「一九世紀ドイツ史」などは、私のいう経世史学の典型例であろう。ドイツの初期ローマン派の歴史学者として著名なヘルダー(Johann Gottfried von Herder. 1774—1803)は、「もし、学問が純粋な愛国心を培う手段であるとするならば、その学問は歴史学にはかならない」と言っている。フランス革命以後の近代ヨーロッパの諸国において、歴史学がいわゆる「経世の学」として、または「国民統合」の役割を担って発展したことは、各国の政治情勢はそれぞれ異るとしても、一様に指摘しうるところである。

平泉氏のいわゆる「皇国史観」も、満州事変から日中戦争、さらに大東亜戦争へと日本の興亡を賭した非常の時代を背景とし、経世の歴史学として、また国民精神の刷新と統合のための歴史観であったのである。ヨーロッパ精神史において、歴史観として著名なものは、遠く一七世紀のイタリアのヴィーコの「新しい学問」をはじめ、啓蒙思想の理性の絶対化を否定し、直観的、有機的世界観に基づいて、人間の歴史を神と自然と人間の総合的連関において把握したヘルダーの「歴史哲学」、理性、世界精神、ロゴスを中核として歴史を把握したヘーゲルの「世界史の哲学」、ヘーゲル哲学における精神弁証法を否定し、「弁証法的史的唯物論」の定立を試みたマルクスとエンゲルス、「西欧の没落」のシュペングラーの文明史観、トインビーの「歴史の研究」における文明論的歴史解釈等々、民族、理性、物、文明を核として歴史の展開を把握する歴史観は、歴史における価値意識と全体像への志向がなければ不可能なことである。

史料蒐集とその批判的選択、調査研究に携るのみに終始する実証史学からは、民族の興亡や未来社会への展望というような歴史学が生じることはない。私は二〇代はじめの若い頃「ソ同盟共産党史」を読んだことがある。

選択科目の一つであった「労働運動史」の講義に、ある外来講師が使用されたからである。今、手許にその著書が

みあたらないので引用する術がないのが残念であるが、私の記憶ではレーニン、スターリンの英雄的讚美にあけくれ、ソ連邦の革命の栄光と発展を謳歌する内容であつたしか覚えていない。マルクス、エンゲルスの弁証法的史的唯物論、その本来の実証性、科学論としての使命とは全く無縁なプロレタリア独裁による理想的共産社会の実現の手段と方法としてのみ活用されているのである。「ソ同盟共産党史」はまさに当時のソビエト連邦国家の経世の歴史学であつた。色川大吉氏は、「歴史の方法」という著述において、「歴史学は数学とか理論物理学のようなものと違って、抽象化された公式なり公理というものを作つて、そこから一つ一つ原理的図式を積み重ねて論理を展開していくような、演繹的な方法はとらない。歴史学はそれとはむしろ矢印が反対で、事実から理論へ帰納的な方法をとるのが普通である。人生には膨大な事実があるし、今日一日だけでも私たちが体験した小さな事実は数えきれない。……そういう膨大な事実そのものを全部確実に再現することは不可能であるし、また、無意味でもある。歴史学はその膨大な事実の中から、人間の叡知を示すことがら、あるいは人間の発展の方向を示すような重要なことながらを選び出し、その事実の中から、歴史の研究対象として耐え得るもの——歴史的事実というもの——を選び出して、その歴史的事実を積み上げながら、ある過去の時代像というものを描いていく学問である。」(二 歴史における価値意識——歴史叙述の方法)といわれている。⁽²⁾この見解に私も同感である。しかし、過去の時代像はそれを描き出すことよつてのみ意義があるのであろうか。私は各民族国家の独自性を形成し、国際社会の相互協力による発展に寄与する文化、文明を意義あらしめるところに「過去の時代像」も価値があり、その現代における意義もあると言わざるを得ない。過去の歴史的事実の究明は、人類の文化発展を跡づけるために必要不可欠なことではあるが、そののみを以て歴史学の任務と対象と考えるのは一面的にすぎるのではなからうか。実証を超えて、未来への展望を示すところにも歴史学の学問としての任務があると私は考えるからである。

二、平泉史学に対する諸評価

一九七〇年代に入り、いわゆる「家永・教科書裁判」をめぐる、皇国史観の術語が関係学界に頻繁に登場してきた。横浜市立大学の今谷明教授によれば、戦後一四年を経た昭和三四年に、大隅和雄氏による平泉史学批判があらわれたと述べられている。すなわち、「平泉澄の皇国史観とアジール論」において、「いちばん早く平泉を批判したのは大隅和雄さんで、『日本の歴史学における^学V—平泉澄について』という題で発表されている。その批判の特色は、戦後の歴史家たちが平泉は途中で変説したという見方に対して、平泉思想の一貫性を主張したことである。……大隅さんの批判の矛先は平泉本人に向うというよりはむしろ、平泉史学の科学性の否定に対して日本のアカデミズム史学はなぜ何らかの批判も加えなかったのか、という問題意識です」⁽³⁾と述べられている。さていま私の手許にある「平泉史学（皇国史観）」批判に関する論説は次の三点である。その第一は、一九七七年（昭和五二年）に初版が出された、当時法政大学教授であり、歴史科学協議会、歴史学研究会会員の松尾章一氏の「日本ファシズム論」のうち、補論として所収されている「平泉澄の歴史観—戦前・戦後の皇国史観の二典型—」という論説と、雑誌「創造の世界」（一九九五年第九五号所収）の、さきに掲げた今谷氏の論説「平泉澄の皇国史観とアジール論」ならびに同誌所収の井上章一、今谷明、秦郁彦、山折哲雄の各氏によるシンポジウム「日本歴史学の反省」⁽⁴⁾等である。まず当初に松尾章一氏の見解からみてみよう。松尾氏は、当時進行しつつあった「家永・教科書裁判」において「被告側（文部省教科書調査官側）証人のデマゴギーを暴露し、……今後の裁判闘争の全面的勝利のために、いささかでも役立つことになれば望外のしあわせである」⁽⁵⁾と最初に述べ、皇国史観に対する姿勢を鮮明に表明する。

続く「戦前の平泉史学とその政治的役割」において、「戦前の平泉氏は、皇国史観の教祖として、歴史学界のみなら

ず政界・教育界において重要な地位を占めた代表的な日本ファシズムのイデオログであった。平泉史学の特徴は、きわめて観念的・精神主義的・狂信的な天皇中心主義的歴史観に立つて、マルクス主義・民主主義・自由主義に反対するイデオロギッシュな戦闘的姿勢が一貫してみられることである⁽⁶⁾とし、平泉氏の初期の著作「我が歴史観」の検討に入っている。まず当初に松尾章一氏の平泉史学批判の見解から述べてみよう。

松尾氏は「この論文（我が歴史観：筆者註）で、平泉氏は、当時支配的となっていた『近代史観』の特徴をつぎのようにならべている。古来の政治史が個人の力をきわめて重大視し、偉人英雄を崇拜する英傑の伝記であったことに『反抗』して、『近代史観』は、時代が英雄をつくる、いいかえれば英雄は時代の大勢に順応したものにすぎないと考えるようになった。……また、政治上の事件や英雄中心史観を否定し、民衆や一般社会生活を観察の主要な対象とする歴史のみかたは、唯物史観の影響によるものである。さらにまた『近代史学』の特徴は、文化史の内容が拡充されたことである。すなわち、文化史が考古学や人類学と『提携融和』したこと、また、一国史だけでなく世界史または普遍史たらしめようとする傾向がみられることである。このような特徴をもった『近代史観』は、わが国の史学界にもはいつてきて混乱をまねいた。しかしながら、歴史とは、『自由の人格が永久にわたる創造開展の世界』である。自然科学がもとめているのは、普遍的法則であるが、歴史学がもとめるものは、特殊的事実である。ここではすべてが新しく、すべてが一回限りのもので繰返しが無い。したがって、『集団的観察のみを是認して、個人の力を蔑視する考え方は、デモクラシーの思想にせよ、唯物論によるとせよ、すべて一様に反省すべきである。』と、平泉氏の歴史観を引用されながら、「平泉史学は、デモクラシー、マルクス主義の影響をうけた『近代史観』を排斥することを主要な目的として登場したのであった⁽⁷⁾」と述べられている。そして、平泉氏の結語の「我は歴史の外に立たず、歴史の中に生くるものである。歴史を有つものではなく、厳密には歴史するものである。前には歴史のオブジェクトに人格を要求した。

今は歴史のサブゼクトに人格を要求する。かくの如く内省してゆく所に、現代史観の特徴がある。外へ外へと発展を急いだ時代は既に過ぎた。思ふにかくの如きはひとり歴史に於いてのみ見らるる所ではあるまい。すべては今や深き反省によって、自己を確立すべき秋である」との言葉をとりあげ、「エドワード・マイヤーの『歴史の理論及び方法』に依拠した、近代歴史学への反発であったのである」と述べ、西南ドイツのヴェインデルバンド、リツケルト等の新カント派哲学との関連にまで言及されている。⁽⁹⁾

松尾氏は、以上の所見から「平泉史学はその最初から、きわめてイデオロギッシュな、一面では up to date な、反動的、反革命的な史観であったということが出来る」と⁽¹⁰⁾とされている。続いて松尾氏は、その他の平泉史学の著作(例えば、中世に於ける精神生活、国史学の骨髄、武士道の復活等々)を詳細に検討されているが、ここでは省略したい。そして松尾氏は、戦後の平泉氏の諸著作、とりわけ「少年日本史」をとりあげ、「むすび」において、「戦後の平泉氏の歴史観が、文部省の教科書検定調査官の村尾次郎氏の歴史観といかに類似しているかは、村尾氏の『民族と生命の流れ』(日本全史)を詳細に対照してみれば明らかである。」といわれ、さらに「国家権力および反動諸勢力は、日本国憲法体制の空洞化をいつそうすすめながら、……また平泉史学に代表されるような露骨な反共主義・反マルクス主義を前面におしだしながら、民主主義や平和主義を否定し、天皇主義・軍国主義・帝国主義をおしすすめてきていることを過少評価することは正しくないであろう。反共主義の大宣伝こそ、ファシズムへの前夜であるという戦前の歴史の教訓を、今こそしっかりと肝に銘じておくときである。」⁽¹¹⁾と、結論されている。松尾氏の本著の初版は一九七七年に発行されているが、およそ二〇年前である。

次に今谷明教授の所説に移ってみたい。

今谷氏は、「歴史家・平泉澄の生涯」の項目から論をすすめて、「平泉の政治活動」では、近衛文麿との交流、とくに

二・二六事件への関与をとりあげ、続く「ヨーロッパ外遊」の項目では、イタリアの著名な歴史哲学者クローチエとの交遊について触れている。「平泉は学生のころからイタリア語の原書を読んでいたようですが、……この人のラテン語の勉強ぶりには驚かされるのですが、そこで本人（クローチエ）と会って、クローチエの歴史観をあらためて確認したと思います。

クローチエの歴史学の特徴は、事実、事象の羅列だけの客観主義ではなくて、すべからず事実を貫く精神といえますか、歴史哲学が必要だ、場合によっては、歴史学は哲学の教えをかりてでも構想を組み立てなければならぬ、という点です。平泉澄も、事実の分析だけでは学問というのは成り立たないというのが一貫した考え方で、その点で羽仁五郎ともひじょうに似ている。羽仁はのちに左翼というか、マルクス主義のほうに傾くわけですが、どちらも客観実証主義だけでは歴史学はだめだという点では共通しているわけです。

羽仁五郎のクローチエの邦訳が出たときに、平泉は『史学雑誌』で紹介し、絶賛しています。⁽¹²⁾と述べられ、さらに「一九三一年ロンドンに渡り、大英博物館に通って、もっぱら伝統主義、保守主義に立ってフランス革命を批判したE・パークの思想を研究している。

以上の平泉の外遊をひとあたり見てみると、結局、ロシア革命批判をするために、ロシア革命の源泉になったフランス革命批判を確認することが目的であったのではなからうかと思えます⁽¹³⁾と述べている。続く「戦後歴史学の平泉観」および「平泉のアジール論」では、数多の資料を分析し詳細に述べられているが、割愛する。最後の項目である「平泉の『革命論』」では、平泉氏がマルクス主義批判を実施せず、蒲生君平、大橋訥庵^{とつあん}、谷川士清、根本通明等の尊皇思想、さらに山崎闇斎、浅見綱斎^{けいさい}、若林強斎の江戸時代の諸学者の革命批判に終始している点をとらあげ、「平泉の『革命論』は期待はずれでした。なぜマルクスの批判をやらなかったのかというのが、私の結論です。平泉史学は反

革命の歴史学なんです、いまから考えるとその反革命が徹底しなかった。このときにマルクス批判をやっていたら、いまのような時期に平泉の革命論を再評価できたかもしれないと思っています⁽¹⁴⁾と結ばれている。次にこの今谷氏の所論を前提とした、さきに掲げた「日本歴史学の反省」というシンポジウムに移ってみよう。

平泉氏の「終戦後の出処進退」の項目で、

「出隆という東大の哲学の先生が敗戦直後に東大の研究室にいて、そのとき平泉澄もいたらしくて、出さんのところに『敗けました』というてきはった。」(井上)、「大八車に自分の本を積んで、研究室を引きあげた。」(今谷)「出隆は平泉澄をそれまでばかりにしていたが、去就の鮮やかさに感心した。ほかの東大の連中が頬かむりしているのに比べれば正直だ、と自伝で書いています。」(井上)、「いちばん鮮やかです、平泉は。終戦の日に東大を辞めて引きあげた人はほかにいない。みな未練がましく残ってしがみついている。」(今谷)

「外遊中に抱いた危機感」の項目では、「留学体験というのは、その後の平泉の思想形成にぜんぜん関係ないのですか。」(山折)「自分の見通しを確認したかったのだと思います。クローチエとかマイネツケに会ったり、パークの思想を研究して、やっぱり自分の考えは正しい、と確信をもったのでしよう。」(今谷)

「戦後歴史学の偏見」という項目では、「戦後の平泉評価というのはひじょうに偏ったものだと思わざるをえない……平泉澄という歴史家は少なくとも卑劣な歴史家ではなかったという気がする。権力を乱用したとんでもない歴史家かもしれないけれども、卑劣な人間ではない。しかし戦後歴史学者は、彼を卑劣な人間だと断罪しましたね。」(山折)「百姓に歴史はあるか」なんて考えている知識人は、あのころたくさんいたでしょう。」(山折)「戦後マルキシズムも、ある意味では同じようなことを、つまり『百姓以外に歴史はあるのか』という意味のことをいつてきたと思うのです。」(今谷)「だから、その反動かどうかわかりませんが、こんどは教科書にやたら百姓一揆の写真やらイラストば

かりが出てきた。多すぎるから減らせと文部省の検定官から苦情が出たくらいに。平泉は百姓を歴史に出してこるところをおさえつけたが、こんどは百姓ばかり出てきて、東郷元帥なんかは消された。そういうふうには振幅が大きいわけです。」(秦)「歴史学者というのは、歴史的な事実を実証することばかりやっている、実証を超えて何かいいたいものがあるのではないですか。……ともかく、たんなる実証史家とどまりたくないという、そういう情念みたいなものがありますか、歴史学者には。それがいい歴史学者は概しておもしろくないですね。」(山折)「今谷さんは平泉史学をどうみているのですか。」(山折)「私が平泉に興味をもっていかると、同じ中世を研究分野にしている歴史家でもあり、戦中と戦後と評価がぜんぜんちがうということがあります。評価がころころ変るような歴史家のあり方、つまりそういう歴史家の成長というか、生々発展の人格に興味をもったわけです。もう一つ、研究者と政治とのかかわりですね。戦後は、平泉と逆の意味で、政治的な歴史家が多い。どうも危なっかしい、うさん臭い気がしないでもない。とくに最近の国際情勢をみているとなおさらです。その点で、平泉と政治の問題というのはけっして古臭いテーマではない。」⁽¹⁵⁾と今谷氏は述べている。

さて、ごく最近(平成八年一月)に、岩波新書版に大久保利謙著「日本近代史学事始め―歴史家の回想―」が加えられた。その第二章第五節に「東京大学国史学科へ」との回想記が述べられてある。そのなかで「型破りだった平泉先生の講義」と題され次のような事柄が語られている。「のちに皇国史観の唱導者となる平泉先生は、この頃は、まだ若かった。講師から助教教授時代で、秀才ですしね、講義は際立っていて、歴史とはこうやるのかと感銘をうけた記憶があります。中世の住来物の成立年代の考証などは実におもしろかったですね。辻先生(辻善之助：筆者註)の講義がアカデミックなものだったのに対して、平泉先生のは型破りだったが、すばらしかった。

平泉先生の代表作は、学位論文である『中世に於ける社寺と社会の関係』、そして『中世に於ける精神生活』ですが、

国史学科の史風を革新しただけでなく、大正史学の新風というべき存在だったわけです。中略 戦時下には皇国史観に走ってしまいました。いまでもわたしは、平泉先生に対しては懐かしい想いをもっている。⁽¹⁶⁾と回想されている。

この大久保著の書評が、高島俊男氏によって、平成八年三月十一日の毎日新聞に掲載されている。「この国史学科のくだりで意外だったのは平泉澄先生だ。なにしろ国史科の平泉教授と言えばわれわれは、半分狂ったような、学者というより平泉教の教祖みたいな人と聞かされていた。それが、こうある。」と述べ、さきに引用した大久保氏の言葉を挿入して、「へーえ、話は聞いてみないとわからないものですね。『平泉』と聞くと反射的に『常軌を逸した人間』と考えたのは大いに問題だったようだ。⁽¹⁷⁾」と高島氏は感嘆されている。

三、E・バークと平泉史学

さきに取りあげた今谷教授の論説においても、一八世紀イギリスのエドマンド・バークの保守主義政治哲学と、平泉史学の関連について触れられてあるが、ここでは直接、平泉氏の著作からバークに関する平泉氏の所見を垣間見してみよう。今、私の手許にある平泉氏の著書のうち、バークについての論説があるのは、昭和八年（一九三三年）に出版された「武士道の復活」が最初であり、昭和五五年（一九八〇年）に公刊された自伝的著作「悲劇縦走」のうち、四四節の「イギリス遊学（其二）」の回想的文章がある。⁽¹⁸⁾「武士道の復活」の第六章に「革命とバーク」の一論説が収録されている。この論説は「上」、「中」、「下」の三節に分けられてある。「上」の部においては、フランス革命勃発当時のイギリス思想界の動向に関して、主としてトーマス・ペイン（Thomas Paine）と、マッキントッシュ（James Mackintosh）の言動が数多の史料を分析されながら叙述されている。「中」の部においては、エドマンド・バークの略歴と初期の著作「自然社会の擁護」（Vindication of Natural Society 1856）と、「審美思想起源論」（A

Philosophical Inquiry into the Origin of Our Ideas on the Sublime and Beautiful 1857) についての解説が行われ、バークの保守主義の原点が論考されている。「下」の部では、バークの著名な「フランスにおける革命の省察」をとりあげ、その梗概が述べられてイギリス思想界への影響が論ぜられている。

この論説「バークと革命」の書き出しは次の文章からはじまる。すなわち「現代日本の青年学徒、口を開けば階級闘争といひ、社会変革といふ。しかもその目標とし尺度とするところ、偏にマルクスに在り、レーニンに在り、遂にロシアを指して我等の祖国と呼ぶに至る。……マルクスの新説を唱へ、レーニンの之を実行に移してよりこのかた、諸国いづれも其の波動を受け影響を被れる中に英国が幾多の困難を抱きながら、兎も角も毅然として動かず、青年学生に至つては重厚沈着、歴史を重んじ伝統を尊び、毫も危激浮薄の風を見ないのは、其の因抑もいづくに在るか。予を以て見れば、英国民は初めより然るにあらざして、現在見るが如き国民性をなすに至つたのは、曾てフランス革命の際に、十分の鍛錬を受けたが為である。而してかくの如き試練の際に、その良き指導者となつたものは、エドモンド・バークであつたのである。」⁽¹⁹⁾ (原文のママ)と、バークの存在意義を高く評価されている。

続いて「上」の部においては、トーマス・ペイン、マキントッシュらの革命礼賛、人権擁護の著書を詳さに検討され、それらの著作が版を重ねてゆく状況を記され、フランス革命によつて惹起した当時のイギリス思想界の動揺がいかに激しいものであつたかを叙述されている。その一、二を引用してみよう。

ペインの「人権論」について「本書は先にもいへる如く、バークの著書に対する反駁の為に書かれたものである。バークのレフレクションズが現れたのは、一七九〇年の十一月一日であつたが、ペインの人権論は翌年の二月に現れた。而してその年の内に倫敦に於いて八版を重ねたといへば、既にバークの書が現れて以後、なお英国に於ける革命

熱は醒めず、思想界は大動乱の中に在った事が察せられるのである。⁽²⁰⁾といわれている。

また、マキントッシュの「フランス弁護論」については、「その題名(フランス弁護論：筆者註)に明らかなる如く、徹頭徹尾バークを反駁してフランス革命を弁護したものであり、内容は五章に分れている。一、フランス革命の必要二、国民議会の組織と性質 三、革命当時及其後の一般の不節制 四、フランスの新なる憲法 五、英人革命讚美者の行動の是認……翌年に第四版が現れたのであって、その爆発力に於いても、その宣伝力に於いても、もとよりペインに及ばないものの、やはり当時英国人の革命熱がなお盛であった事を察するに足るのである。」さらに「而して初めフランス革命に対する同情は、やがて革命の憧憬となり、遂にイギリス革命の企画となって進んで行った。而してここに注意すべきは英仏革命党の提携である。彼等は相互に援助し、協力してその革命を遂行しようとしたのであった。」⁽²¹⁾と述べ、当時のイギリスにおける革命への気運が高まりつつあった状況を指摘されている。

そして「上」の部の結びとして「フランス革命時代に於ける英国人が、重厚沈毅必ずしも今日の如くならず、むしろ輕燥浮薄直ちにフランス革命に感染し、これを移してイギリスに実行せんとしたが……炯々たる眼光よく革命の本質を看破し、殷々たる警鐘をうって同胞を覚醒せしめ、英国革命を未然に防ぎ得たのみならず、永く英国人をして此の熱病より免れしめた。これ外ならぬエドモンド・バークである。」⁽²²⁾と、バークの存在価値を評価される。「中」の部において、平泉氏はバークの初期の著作に注目する。「一七五六年、バークは二つの書物を公けにした。自然社会弁護論と、審美思想起源論である。……我等の注意すべきは自然社会弁護論である」とされ、バークのこの書の成立過程を綿密に検証されながら、そのうちの一文を引用される。すなわち、「もしすべての道德的義務の履行及び社会の基礎が、各個人に明瞭にその原理を論証せられなければ成立たぬといふならば、社会は崩壊破滅するの外はない、もし各

個人がその身の劣弱なるを思はず、事物の長き系列の中に於いて下層に在り下位に属するを悟らず、一切の問題についてほしいままに空想を馳するならば、古来認めて優れたるもの、尊敬すべきものとなしたるもの、合理主義の批判の手に瓦解しないものは、一つもないであろう。人若し経験を斥けて抽象的なる政治的瞑想に耽れば、結局無政府主義に陥るの外はないのである。⁽²³⁾とのバークの言を引き、「これがバークの根本的な而して確乎抜くべからざる意見であつた。」と述べ、さらに「バークの反革命思想が、一七五六年に既に明瞭に現はれ、それが彼の思想の根本となり中核となつて其の一生を貫いている事は、特に注目しなければならぬ。人或は彼の思想は、フランス革命の勃発に眩惑して常軌を逸し、従来の態度を一変して革命反対の急先鋒となつたのであるといふ。これは然しながら深く彼の思想の根底を知られざるもの、彼の後年の主張は、既に一七五六年の自然社会弁護論に明らかに現はれて居り、彼の意識的理性的革命を斥けて自然の成長を尊ぶ精神は、彼の一生を貫いているのである。」⁽²⁴⁾と、バークの保守主義の根元を指摘される。最後の「下」の部においては、バークの議会における反革命活動の一端に触れ、「フランス革命の考察」の梗概を記されている。そして、このバークのフランス革命批判の書に対する、イギリス思想界における毀誉褒貶の状況を多くの文献を検討され引用されて、革命礼讃のイギリス思想界が次第にバークの思想に傾斜してゆく状況が克明に叙述されている。最後にこの「革命とバーク」の論説は、次の言葉によつて結ばれている。すなわち、「バークの『フランス革命の考察』はかくの如くにして英国国民の思想方向を一変せしめた。フランス革命を狂喜して迎え、ひとり同情を以てその成功を期待したばかりでなく、同様の革命を英国にも招来せんとした英国国民は、バークによつて革命の深刻なる害毒を洞察し、飄然として歴史に帰り伝統に就いたのである。一七四三年二月、英国が遂に起つて仏蘭西と戦ふに至つたのは、バークによつて転向せる英国の輿論が、遂に宰相ピットを動かしたものであるといはなければ

ばならぬ。」と、近代イギリス精神史における、エドモンド・バークの存在価値を再三にわたって強調されている。⁽²⁵⁾ さて、私の書架に、上田又次著「エドモンド・バーク研究」⁽²⁶⁾なる一書がある。昭和十二年（一九三七年）十一月刊行のものである。

本論は、第一章、伝記的考察から始められ、第二章、現実的批判においては、アメリカ革命、アイルランド問題、インド問題、フランス革命へのバークの関与を扱い、第三章では、政治思想的考察として、バークの歴史主義、宗教論、道徳論を論考し、第四章、歴史的理解においては、バークの近代政治思想史的意義と、世界史上の意義について論じられている。上田氏は恐らく平泉氏の指導のもとに研究生生活を送られたのであろうか、この書の「序」は平泉氏の筆になるものである。「天下の変、革命より大なるはなく、聖人の憂慮、革命より深きはなしとは、根本先生の語でたるが、その革命の禍害の深刻にして、影響の広大なるもの、フランス革命の如きは他に比類を見ない。その道徳の蹂躪、伝統の中断、四海の波及、八方の感染、是こそは深く憂ふる者の尤も意を注いで考究すべき問題である。

然るにフランス革命に関する著述の、汗牛充棟、極めて多きに拘わらず、真にこの大變をその本質に於いて理解し、その禍害をその深奥に穿って洞察せるもの少いのは遺憾なりとしなければならぬ。その点に於いて多とすべきは、英のエドモンド・バークである。

バークが革命の当時に於いて、いち早くその本質を理解し、敢然として之に反対したのは、その見識といひ、真に拔群であつて、亦史上の一壯観といふべく、而してここに今日我等の深く考ふべきものが存するのである。されば予も先年バークに就いて一文を草した事があるのであるが、此の度上田学士の研究によって、更に詳細正確に、この人の全貌を見る事が出来るのは、甚だ喜ぶべく、すなはち勤めて之を公利するに至つたのである。読者願はくは本書に

よつて更に深くフランス革命の本質を考へ、転じて滔々たる現代の風潮に三思を致されむ事を。

昭和十二年十一月五日 平泉 澄⁽²⁷⁾とある。

筆者上田氏は「緒論」において、まず当初に「歴史は其の文字の示すが如く変化発展を必要とする」との平泉氏の「国史学の骨髄」に示された言葉を引用し、「革命こそは伝統を否定し、過去を敵視し、これに反逆しこれを破壊するものである。即ち革命は歴史を遮断して、其の永遠の生命を亡ぼすものである。革命と歴史とは、それ故に相互背反矛盾するもの、革命ある所歴史亡び、歴史の存する所革命は無いのである。」との平泉氏の「革命論」の一文を挿入しながら、「誠に歴史が真の意味に於ける歴史たる事を要求せらるる時、それは革命とは断じて相容れない。然らば歴史の神髄は何であろうか。『不断に存続するもの』の自己顕現』即ち、歴史は『革命』にあらずして『復活』でなければならぬ。其は正しき基礎のともすれば黒雲に掩はれんとし、其の本質的光彩を失はんとする時、其の黒雲を追い払ひ、吹き飛ばせては、かつてありし光輝ある正しき伝統に結び附かんとする精神の働に見られる。即ち復活とは革命にあらずして、正しき伝統に生きる事である。正しき伝統を尊重し、正しき伝統に生きる精神こそ、真に歴史に生きるものと言ひ得るであろう。斯くして相承け、相嗣して進み行く處に真の歴史主義は存する。」と述べられている。そして、この一文の註釈として、羽仁五郎氏の「佐藤信淵に関する基礎的研究」における歴史観をひきあいに出してこれを批判する。すなわち、「この意味において反歴史主義を振りかざすものはマルクス主義の歴史家たちである。彼らは革命発展を以て歴史の必然性とみる。そこには伝統の存続は見出されない。日本における最も正統的なマルクス主義歴史家羽仁五郎氏は『今やわれわれは自ら歴史の変革的なまた建設的な時期の中にある。従つてわれわれの歴史的叙述は、一方において当然破壊的作業を行はねばならない。いまはむしろあらゆる伝統尊重の衣裳においてみるのではなくして、かえつて過去をその現実の全身において捕ふべきである。そしてこの把握は、まず破壊的批判としてあらわ

れる。しかしかかる批判を経てわれわれは、次にそして始めて過去の構造の現実的規模をその真実の新しさにおいて理解するであろう』と言っている。伝統の破壊、すなわち、破壊的作業にこそ、彼らの歴史叙述は用いられる。しかしこれこそ歴史の否定であり、歴史そのものの中に生きず、これと背違することによって、歴史家の自己自身における死滅である。これは吾人の歴史主義と断然袂を別つものたるは言ふをまたない。」⁽²⁸⁾と、上田氏は、羽仁氏の歴史観を批判しているが、この上田氏の所見は、平泉氏の史学思想を継承し、祖述されたものといえよう。

上田氏が、当時の国史学科に学ばれたのか、西洋史学科に在籍されたかは詳かではないが、平泉氏の「革命とバーク」の論説が強い影響を与えたことは想像に難くない。また、マルクス主義に対する、平泉氏の所見は、次の文章にみられる。すなわち、昭和七年（一九三二年）九月に初版が刊行された「国史学の骨髄」第六章に「中世文化の基調」と題された論説が収録されている。

この論説は、昭和三年（一九二八年）十二月に脱稿されたものである。「今や科学は其の全盛を極め、他の一切の文化財を足下に蹂躪し昂然として文化価値の王座を占めている。而してただに数学や物理学等の純正科学のみにとどまらず、一切の文化に対し、科学的方法による研究を加へ、科学的解釈を下さんとしつつある。その傾向の極端に走り、その勢の激する所、所謂唯物史観の主張を見る。

彼等は所謂マルクス主義を奉じ経済関係を以て一切社会現象の基礎と断じ、政治も法律も文学も美術も、哲学も、悉くこれ経済関係に依つて成立し、又変形する所の影に過ぎずとし、而して歴史に対しては、一に経済関係によつて生ずる不断の階級闘争なりと観するのである。しかるに斯くの如き見解は、科学の萬能を信じ科学の全盛に酔ふ現代の特徴であり、或はその余沫に過ぎざるものであつて、そのいふ所には幾多の真理を含み、また新なる示唆に富むとはいへ、之を以て唯一の解釈となし、絶対の真理なりとなす事は出来ない。時代は推移する。而して時代時代によつ

て人生観は異なり、その要望する対象は異なり、その目的に向つての努力は異なる。昨の是とした所、既に今の非なるを知つたならば、今の是とする所、やがて明の非なるを考へなければならぬ。……古今文化の相違を仔細に吟味し、人心の帰趣を深刻に検討し来れば、ポアンカレが科学的真理の絶対価値説すら、なお一時代の熱狂と観られないでは止まぬ。況んやマルクス主義の危激極端の論に於いてをや。」と、記されている。この論説が著された昭和三年は、共産党員の全国的大検挙が実施された、いわゆる三・一五事件が起り、二月には共産党機関紙「赤旗」が発刊されている。また、この年十一月一〇日には昭和天皇の即位式が挙行され、国内は左右対立の動向が激化し、ソ連ではスターリンに対立したトロツキーらが国外追放（一月）され、一〇月にはいわゆる「第一次五ヶ年計画」が発表された時期でもあつた。

四、むすび—皇国史観への一視角—

昭和五年（一九三〇年）から翌六年にかけて、平泉氏のヨーロッパ歴訪が行われているのであるが、その留学中にロンドン大英博物館におけるエドモンド・バークに関する史料の調査収集が実施されている。また、ベルリン大学ではフリードリッヒ・マイネッケと、ナポリではベネデット・クローチェと数回にわたつての会談が行われている。この間の事情については、早くは昭和八年の「武士道の復活」、昭和十一年の「萬物流転」の二著に述べられているが、戦後昭和五五年の自伝的作品ともいふべき、「悲劇縦走」において、ヨーロッパ歴訪の回想記に再論されている。

私はこの小論において、マイネッケ、クローチェと平泉史学についても触れる予定であつたが、紙数の都合上次の機会にゆづることにする。私のこの小論は、一、歴史学の価値意識、二、平泉史学に対する諸評価、三、E・バークと平泉史学の順序で論を運んできたが「むすび」としていわゆる皇国史観に対する私見を述べてみよう。当初におい

て、歴史学には大別して二つの課題があることを私見として述べた。実証史学といわゆる経世史学である。

私のいう経世史学とは、主として一九世紀のヨーロッパやアメリカにあらはれた歴史書のように、自国のナショナリズムの確立に寄与しようとし、実証的研究よりは自国の国是の確立に重点をおく歴史学をいう。

その意味で、マルクス主義の唯物史観も厳密な意味での実証史学というよりは、未来の理想社会実現にむけられた歴史哲学である。

平泉氏の初期の実証的研究（例えば、中世に於ける精神生活、中世に於ける社寺と社会との関係等）については、門外漢の私ごとやかく論議することは不可能であるが、いわゆる皇国史観はここでいう経世史観であつたことに間違いはない。さきの「平泉史学に対する諸評価」のなかで引例した松尾氏が「平泉史学は、きわめてイデオロギッシュな、一面では up to date な反動的、反革命的な史観」であつたと断言されているが、いわゆる「家永・教科書裁判」における「家永・原告側」に即した皇国史観批判であり、松尾氏の所見もまた「up to date なイデオロギッシュ」な立場に立っているのではなからうか。ソ連邦崩壊後の今日、往時の日本マルキシストたちは、その崩壊に対していかなる見解を抱き、いかなる意見を開陳しているかを私は寡聞にして知らないが、唯物史観を科学的歴史観として信奉してきたマルキシストの今日の見解を聞きたいものと思つている。さきに掲げたシンポジウム「日本歴史学の反省」のうち、「戦後歴史学の偏見」の見出しにおいて、今谷氏が「戦後マルキシズムも、ある意味では同じようなことを、つまり『百姓以外に歴史はあるのか』という意味のことをいつてきたと思うのです。」との発言に対して、秦郁彦氏が「だから、その反動かどうかはわかりませんが、こんどは教科書にやたら百姓一揆の写真やらイラストばかりがでてきた、多すぎるから減らせと文部省の検定官から苦情が出たくらいに。平泉は百姓を歴史に出してくることをおさえたつたが、こんどは百姓ばかり出てきて、東郷元師なんかは消された。そういうふうには振幅が大きいわけです。」との

コメントに全く同感である。また今谷氏が「もう一つ、研究者と政治のかかわりですね。戦後は、平泉と逆の意味で、政治的な歴史家が多い。そういう政治奉仕する歴史学というのが、どうも危なっかしい、うさん臭い気がしないでもない。とくに最近の国際情勢をみているとなおさらです。その点で、平泉と政治というのはけっして古臭いテーマではない。」との発言も、われわれ政治哲学の分野の研究に携る者にとっても示唆を得た見解である。さきに引用した大久保利謙氏の著作に対する高島俊男氏の書評も、時代の変遷を実感させられる見解として面白く感じた。平泉氏が昭和三年に著された文章、すなわち「時代は推移する。而して時代時代によって人生観は異なり、その要望する対象は異なり、その目的に向つての努力は異なる。

昨の是とした所、既に今の非なるを知つたならば、今の是とする所、やがて明の非なるを考えなければならぬ。」との一文をさきに引用したが、戦後五〇年のいわば短い時間的推移においても、平泉氏の言葉のごとく、平泉史学に対する評価も移ろいつつあるようである。三、E・バークと平泉史学においては、平泉氏がバークの思想と行動に対して徹頭徹尾、礼讃されていることについて述べた。昭和五年から六年にかけての平泉氏の留学期間、また「バークと革命」の論説があらわれた昭和八年当時は、上海事変（昭和七年一月）、満州国建国宣言（昭和七年三月）、国際連盟脱退（昭和八年三月）、共産党幹部佐野学、鍋山貞親の転向声明（昭和八年六月）、神兵隊事件の発生（昭和八年七月）、ヒトラー政権樹立（昭和八年一月）等々、内外にわたつて物情騒然たる時代であつた。二二歳の青春時代にロシア革命に当面し、大正末期から昭和初期の内外数多の変動を体験された平泉氏は、日本における「革命」を最も危惧されたことは、同氏の諸論説の随所にみられるところである。

フランス革命の勃発にともなう一八世紀末のイギリス思想界の動揺を抑止し、伝統社会護持のために、心身ともに努力を傾注したバークに、強いシンパシーを抱かれたのも当然であつたことと思う。「バークと革命」を一読して、日

本中世史の専攻者であった平泉氏が、西洋史学の領域にも造詣が深く、しかも数多の文献を読破され、史実に忠実にバークの業績について語られていることに私は深甚な敬意を表するものである。戦後の日本の学界では、政治思想史の領域においてもバークの研究は盛んに行われてきたが、この平泉論文を引用した著述を私は見たことがない。恐らく平泉史学即皇国史観との風評によつて、研究者の多くは敬遠し看過してきたのであろうか。

バークに対抗したペイン、マキントッシュをはじめ、当時のイギリス思想家たちの文献を渉猟された平泉論文は、実証史学者としての側面を明らかに示されていると思う。皇国史観の唱導は、このバークの心情を体得された平泉氏の国体の護持、伝統の維持という情念から派生したものである。最後に私事にわたつて恐縮であるが、私の平泉氏の印象について付加しておきたい。恐らく昭和三〇年代のはじめの頃であつたらう。ある都内の高等学校の日本史を担当している先輩に伴われて、銀座にあつた出光興産の建物の中にある「平泉歴史研究所」との表札のかかつている研究室を訪れた。平泉博士は、コンクリートの床の上に数枚の畳を敷いて、座ぶとんに正座してわれわれに応待された。平泉令夫人も御一緒にそこにおられた。令夫人は「いまどき、平泉を訪ねてくださる方がおいでになるとは」と微笑されながら、抹茶をたて和菓子すすめてくださった。先輩の紹介で、私の研究課題を承知された博士は、「是非マイネツケとクローチェは勉強なさい」とすすめられた。

博士の「月沈原の想出」（武士道の復活所収）を少年の頃に読んだ事があり「ゲッチンゲン（Göttingen）に『月沈原』という当て字が附されたのに非常にロマンティックな気持ちを抱きました。」と私が話すと、博士はにこにこ笑われながら、「ゲッチンゲン大学はほんとうに懐しいよいところでした」と語られ、眼を細めながら回想されている風であつた。

わずか三、四〇分の博士との面談であつたが、その後昭和四八年（一九七三年）のドイツ留学の際に、私はゲッチ

ンゲン大学を訪ねた。博士の留学当時から四三年の時間の経過があつたが、私の想像していたゲッチンゲンは、まさに博士の想出に語られているとおりであつた。その当時、「解説近世日本国民史」か「少年日本史」を博士は執筆中ではなかつたかと思う。疊の上に中学生の読みそうな本が積まれていたのを覚えている。

ただ一度、しかも三、四〇分の短時間ではあつたが、いまでも博士の温顔と令夫人の印象は私の脳裏に刻まれている。

註

- (1) 拙著「近代ドイツ政治思想研究」(昭和六三年慶應通信株式会社刊)において、第二部第一章「E・バークとドイツ・ローマン主義の政治思想」、第三章「ポール・ラガルトの政治思想」、第三部第三章「文明史観における政治思想―O・シュペングラの政治観をめぐって―」第八章「歴史主義と自由主義―F・マイネツケをめぐって―」等の諸論説参照。
- (2) 色川大吉著「歴史の方法」(一九九二年同時代ライブラリー112、岩波書店刊)四八―四九頁参照。
- (3) 今谷明著「平泉澄の皇国史観とアジール論」(一九九五年雑誌「創造の世界第九五号」所収一三一―一四頁参照)。
- (4) 松尾章一著「日本ファシズム史論」(一九七七年法政大学出版局刊)のうち、補論四「平泉澄の歴史観―戦前・戦後の皇国史観の一典型―」および井上章一、今谷明、秦郁彦、山折哲雄シンポジウム「日本歴史学の反省」(雑誌「創造の世界第九五号」所収)。
- (5) 前掲松尾著 二四〇頁参照。
- (6) 前掲松尾著 二四一頁参照。
- (7) 前掲松尾著 二四二―二四三頁参照。
- (8) 前掲松尾著 二四三頁参照。
- (9) 前掲松尾著 二四六―二四七頁参照。
- (10) 前掲松尾著 二四七頁参照。
- (11) 前掲松尾著 二六八―二六九頁参照。

- (12) 前掲今谷著 一二頁参照。
- (13) 前掲今谷著 一三頁参照。
- (14) 前掲今谷著 二五頁参照。
- (15) 前掲シンポジウム「日本歴史学の反省」中、二九、三五、四〇、四一、四三の各頁参照。
- (16) 大久保利謙著「日本近代史学事始め―歴史家の回想―」(一九九六年岩波新書四二七刊) 六四―六五頁参照。
- (17) 高島俊男評「日本近代史学事始め―歴史家の回想」(毎日新聞一九九六年三月十一日)所収。
- (18) 平泉澄著「武士道の復活」(昭和八年至文堂刊)「悲劇縦走」(昭和五年皇学館大学出版部刊)
- (19) 前掲平泉著「武士道の復活」一一三―一四頁参照。
- (20) 同著 一二七頁参照。
- (21) 同著 一三七―一三八頁参照。
- (22) 同著 一四三頁参照。
- (23) 同著 一五九頁参照。
- (24) 同著 一六〇―一六一頁参照。
- (25) 同著 二〇三頁参照。
- (26) 上田又次著「エドモンド・バーク研究」(昭和十二年至文堂刊)
- (27) 同著 「序文」参照。
- (28) 同著 二―三頁参照。
- (29) 平泉澄著「国史学の骨髄」(昭和七年至文堂刊) 一一七―一一八頁参照。